

聞き取り

## 戦中期の学生生活と「学徒出陣」 —遠藤榮一氏への聞き取り調査記録—

永田 英明

本稿は、2009年1月13日に実施した、遠藤榮一氏（宮城教育大学名誉教授）に対する聞き取り調査の記録をまとめたものである。

遠藤氏は宮城県角田のご出身で、昭和14年4月に旧制第二高等学校入学、同17年3月に同校を卒業し翌月東北帝国大学法文学部に進学された。東北帝大在学中の昭和18年12月に法文系学生に対する徴集猶予廃止によって海軍に入隊、海軍予備学生として鹿児島航空隊で訓練を受けたのち予科練の教官として土浦航空隊に勤務しそこで敗戦を迎えた。大学は兵役服務中の昭和19年9月に卒業扱いとなったが、戦後法文学部の補修科生として大学に復帰し、その後仙台一中（のち仙台一高）教諭を経て宮城師範学校—東北大学教育教養部の教官となり、1965年の宮城教育大学発足に際し同大に移られた。

この調査は、遠藤氏が宮城学院女子大学の非常勤講師を務められていた縁から、宮城学院女子大学の大平聡教授に機会を設定していただく形で実現に至った。もともとの調査の趣旨はいわゆる「学徒出陣」経験者の聞き取りを行うという点にあったが、実際には「学徒出陣」の経験そのものに限定せず、旧制高校時代を含めた当時の学生生活から軍隊生活、敗戦直後の状況などについて広く聞き取りを行った。調査は上述の経緯から、大平教授、永田および鈴木陽子氏（宮城学院女子大学大学院人文科学研究科学生）の3名が遠藤氏およびその実弟の遠藤昭助氏を宮城学院女子大学にお招きして話をうかがうという形で実施した。また聞き取り記録の文字起こし際には小杉隆彦氏（当時東北大学文学部学生）のご協力を得た。

長時間にわたる聞き取りとなったため、紙幅の関係上その全文をここに掲載することはせず、特に戦争と学生生活の関わりに関する部分を中心に、話題となったテーマごとに抜粋し、必要な注記等を加え再構成することとした。文章自体は当日の内容をそのまま起こした原稿に遠藤氏ご自身で手を入れていただいたものをもとにしているが、同じ内容の繰り返しや確認、その他調査内容に直接関係のない会話については適宜省略している。テーマの選択と再構成は、永田の責任で行ったものである。

なお聞き取りでは、このほかに二高時代の学生生活の話や、戦後大学教員となってからの、宮城教育大学分立の経緯に関する話なども採録したが、紙幅の都合上、本稿では省略させていただいた。聞き取り記録の全文は、今後東北大学史料館において保存されており、閲覧希望者には公開する予定である。

## [遠藤榮一氏聞き取り記録―抜粋―]

日 時 2009年1月13日 午後1時～5時

場 所 宮城学院女子大学

聞き手 大平 聡・鈴木陽子・永田英明

## ◎高校・大学への志望

永 田 大学のお話を中心に、とは考えているんですが、その前にぜひ大学に入る前の旧制高校時代のお話を…。二高は十四年にご入学ということなんですが、二高に進まれる経緯といたしますか、そのあたりからお話をいただけますでしょうか。

鈴 木 すいません、中学校はどちらの…。

遠藤昭 角田中学校<sup>(1)</sup>（兄は）勉強好きなもんで…。

遠藤榮 今、（私が）勉強好きって言いましたけどね、大体中学校に入るあたりから、「人生とは何か」という疑問を抱いちゃった。それで何とかこの問題を解いていくためには、ともかく大学まで進んで勉強しなきゃいけない、という気持ちになったことは確かです。ただ、うちは商家ですが、そんなに豊かな財産があって、子供たちを大学まで進学させるような資産は無かった。それから、ただ私は幸か不幸か中学校は三年ぐらいまでは、クラスで五、六番ぐらいだったんですが、中学校の三年後半、四年あたりから、自分では予習復習はまったくしないのに成績がどんどん上がって（笑）。特に英語と幾何学が得意だったようです。（…略…）

ただ私はさっき言ったようにその「人生とは何か」とか、「人間とは何か」とか、そういう問題って言うのが基本にあったもんですから、文科に進んだ、ということですね。

永 田 同級生の方々では、高等学校に進まれた方はいらっしゃったんでしょうか。

遠藤榮 高等学校に進んだのは、同期では無かったかなあ。四年生で抜群の成績を持っていた本田治夫君というのがいて、私と二人（二高に）合格しました。角田中学からですね。

遠藤昭 当時同級生の方は戦争中なので、昔の軍隊の学校、陸士海兵に進まれたのも大分あったようですね。

遠藤榮 海軍兵学校と陸軍士官学校という軍隊の学校が、（旧制中学を）卒業する前に入れたんですよ。大体（中学）四年生ぐらいのときですかね、（これらの学校に）入るのは。だから、結構中学校で良い成績のものが軍隊に進んじゃう。私は軍隊に進むという気持ちは全く無くて…。

大学に入ってから（のこと）ですが、「戦争するなんて、まことに愚かでいやなことだ」という考えがずっとあって…。私の大学の恩師である、土居光知<sup>(2)</sup>という有名な先生がいて、この先生がいたんで私は東大も京大も無視して東北大に進んだんですが、この先生はお酒を飲む人ではないんですけど、軍隊に入るときに二人で酒を飲みながら、送別をしてくれたんですね。その時に、「戦争というのはいやなものだ、これはしてはいけないものなんだ、と思います」と言ったら、「私もそう思う、その通りだ」と言われた覚えがありますね。当時は戦争を批判するとか、軍隊を批判するなんていうことは、いわば非国民のすることで、人前で公に言うってことはほとんど出来なかった時代でしたね。

### ◎寮生活と高校生活

永 田 少しまだ高校時代のお話を中心にお話を進めて生きてみたいです、そうしますと十四年の四月に二高に入られて、当時は校長は阿刀田令造先生ですね。

遠藤榮 そうです。

遠藤昭 二高は当時全寮制ですかね。寮に入るんだったね。

遠藤榮 そうです。一年生は全寮制です。

永 田 どちらの寮にお入りに。

遠藤昭 明善寮じゃなかったかな。

…

大 平 一年生の時だけなんですか、寮に入っているのは。

遠藤榮 そうです。二年以上はですね、寮生活を続けてもいいと、希望者は。そうでなければ下宿をするということで私は下宿を二年間やりました。

大 平 どのあたりに下宿されたんですか。

遠藤榮 旧制二高は北五番町にあったんですね。で、今はもう、その後東北大の農学部になっていたところですが、それから五番町から一番町まであるわけですね、六番町、七番町もあったわけですがけれども、でその四番町の辺り、五番町と四番町の間ぐらいにある、下宿屋が何軒かあったの当時、学校の近くに。で、その一つに入って、あとは卒業するまでいたということですね。

永 田 二高の他の学生なんかも一緒に下宿をされていたんでしょうか。

遠藤榮 ええ、下宿していましたね。

永 田 寮のご記憶はあんまり無いというふうに仰られたんですが、寮生活はあまり、なんといいんでしょう、印象がそれほど強くなかったということなんですか。

遠藤榮 寮はですね、確かに、私にはあまり合わなかったといいますかね…。

鈴木 規則正しい生活なんですか

遠藤榮 いやいや、規則正しくないんですよ。もうね、寮生活って言うのは寮生の思うままにできた。ただ寮生といってもですね、何と言うかな、腕力があって、要するに人に恐れられるようなのが支配的な地位にあってですね、寮生活をやっぱり支配していた。だから寮生の行動やなんかも、そういう者がいわば、支配していたということがある意味で言えると思いますね。ただ全体的に言うと寮っていうのは非常に自由なことは自由でした。で、やりたい放題で。もう今、ここでこういうことを言うのもおかしいですが、寮の端には必ずトイレがもちろんありまして、ところが我々の時代の寮っていうのは明善寮っていったんですが、その寮は…自分の寮の部屋の窓を開けて、そして寮の庭におしっこをするのが普通でしたね。

永 田 寮雨ってやつですね。

遠藤榮 寮雨です…。

永 田 明善寮に入られたのは、何と言うんでしょう、上から決められたような形で入ったんでしょうか。

遠藤榮 ええ、これはね、明善寮だけじゃなくて他には、例えば仏教を信仰する者は仏教徒だけが入るとか、そういうものもありましたけど、大体大部分の学生を収容するのが明善寮だっ

たんです。これは一年間全寮制です。ですから明善寮以外の寮でも結構ですが、とにかく寮生活は一年間はしなきゃいけないということになっていました。で、その寮の好き好きによって一年で出てしまう、私みたいに出てしまう者、これは大部分だったと思いますが、あとは二年三年と、卒業するまで寮生活をしてきた人もありましたね。

大 平 そういう人達が寮長を任ずるんですか。残ってる人達が、上級生が。

遠藤榮 同級生、そうですね、やっぱり共同生活っていうか、つまり自分ひとりになって色々なことを、本読んだり物を考えたりしたいというタイプの人はあんまり合わなかったでしょうね。だって、ひとつの部屋に少なくとも三人ぐらいはいた筈です。

遠藤昭 寮長っていうのはどういう

大 平 寮長になるのは上級生なんですか。

遠藤榮 ええ、それがおそらく三年生ぐらいでしょうね、だったんじゃないかと思いますね。とにかく寮が好きなのは卒業するまでいた、ということだったようです。

永 田 実際の寮の中の雰囲気っていうのは、逆に言うとそういう、言い方は悪いかもしれませんが、寮が好きでグループと、それからやはりそうではない人達っていうのと、何て言うんでしょうかね、かなりいろんな人間がいて、というような形になるんでしょうか。

遠藤榮 そうですね。一年生は全寮制だということ、確かにそういう寮が好きで学生ばかりじゃない、ということだったと思いますね。ですから私みたいにあんまり好きじゃない者は、一年以上はいるつもりは全く無かった。寮生活はやっぱり、確かに集団生活によっていろんなことを学んだっていうのは確かにあったと思います。ただ、やっぱり一年以上続けるのは私には無理だったようですね

大 平 ストームとかやったんですか。

遠藤榮 ストームはね、あれはもう、よくやりましたね。

大 平 寮で。

遠藤榮 ええ。寮のときは、うん、ストームか・・・寮の中で何かやっぱり一つの規則があっただけっていうのは、学生の自主的な規則があっただけ、何してもいいわけではもちろん無かったと思いますけれど、かなり自由だったと、ただ、上級生とか、あるいはどっちかという腕力の強いの方が支配的な立場に立つ、ということだったと思いますね。そうですね、あの頃の寮の生活の思い出は…。

永 田 あるいは先生が、まあ一年間だけということですけども、その中で、寮で一緒になられた友人ですとか、先輩ですとか、そういった方の影響とかっていうことはあまりなかったんでしょうか。

遠藤榮 そうですね、影響というのは、どうでしょうかね。気が合う、つまり親しくなる者となれない者っていうのはありましたけど、まあ確かに、無意識のうちにいろんなことを教わってはいるんでしょうけど、何か、こういう先輩からこういうことを学んだとか、そういうことはちょっと記憶には無いですね。

…

永 田 学校生活の中での、どういうことを楽しみにしていって、学校生活を送ってらっしゃったんでしょうか。

遠藤 榮 これはやっぱ、数は少ないですけども、親しい友達がありまして、これは、どちらも、たまたまでしょうが、北海道出身の友達で、席は私の隣と、ちょっと斜め向かい、近くにあって、教室の席が近く、あれでしたけど。で、この二人とは仲良くやって、何をして遊んだかということまでは、ちょっと言えませんが、まあ一番町まで一緒に歩いて行って、お茶を飲んだり、酒を飲んだりしたんじゃないかと思えますね。で、当時はもう、何ていうか、高校に入ったら酒を飲むことは一応、許されてましたから。で、私はね、嫌ではないんですが多く飲めないんですよ。もうこの茶碗で一杯ぐらい飲んだら満腹になっちゃう。そういうことで、一番町までよく遊びに、寮から遊びに出かけて。で、その途中に交番があったんですね。それで酒に酔っぱらったりすると交番に立ち寄って、交番の巡査さんと色々お話をして、巡査さんは一目置いて、我々を丁重に扱ってくれました。そういう記憶はありますね。

永 田 やっぱ高校生は大事にされてたってことなんですかね。

遠藤 榮 ええ。で、一番町、店がそのままだとわかるんですが、ほとんどもう変わってますから、どういう店に行ったのかってことは今ちょっと説明しにくいです。

永 田 二高の学生がよく行くお店とかそういうものは大体決まっているものなんですか。

遠藤 榮 そうですね、大体決まっていたね。

### ◎高校生活と戦争

永 田 (二高に入学された)昭和十四年から(卒業される)十七年春まで、ちょうど、だんだん戦争に向かってという時代になってくるわけですけど、そういう中でも高校生活(旧制二高)を送られながら、そういう時代の変化をお感じになることはあったんでしょうか、当時。例えば学生生活は、逆にあまりそういうことに影響を受けないで、割合自由な雰囲気であったのか、あるいはそうでないのかってあたりは。

遠藤 榮 戦争が始まったって言うことは、戦争に向かいつつあるってことは意識していたはずですが、あんまり、それにとらわれずっていうか、そういうことは高校生活のときには(意識することは)無くて済んだ。戦争の影響をもろに受けたのは大学に入ってからですね。

…略…

永 田 …戦争との関わり(を意識する機会)ということであれば、多分高校時代にも色々、例えば教練の時間とかもあったかとは思いますが、そういうご記憶はございますでしょうか。

遠藤 榮 ええ。教練もあった筈ですね。当時は二高だったら、大佐ぐらいですかね。その階級の人がおそらく来ていたと思いますが、二高での教練っていうのは、あんまり記憶は無いです。何かをしたんでしょうけれども、大したことはおそらくしなかったんじゃないかなって感じがするんですね。

永 田 あんまり、厳しいことをやったというような感じではなかったと。

遠藤 榮 そうですね。

鈴木 行軍も無かったんですか。軍事演習とかは。

遠藤 榮 あんまり二高の時に行軍をしたって記憶は無いですね。

…略…

鈴木 開戦が一九四一年の十二月八日じゃないですか。そのあとに、その前後でたぶん大学への進学を決められたと思うんですけども、十二月八日に開戦、昭和十六年の十二月八日に対米戦開戦になるんですけども、そのときの学校の様子っていう、移り変わりっていうもののお話をお聞きしたいなと思うんですけども。

遠藤榮 昭和十六年。まだ二高の三年生ですね。それは確かに、聞いて「あ、いよいよ戦争になったな」という気持ちはした記憶がありますけれども、それによって実際に自分の考えとか生活が影響を受けたっていうことまではいかなかったと思いますね。まあいわば、他人事みたいな感じでいたんじゃないかと思います。

永田 同級生の方々もやはりそのような雰囲気でしたか。

遠藤榮 ええ、それは多かったと思いますね。ただ軍国主義的な傾向の強い学生がいないということはなかったと思いますけれどもね。いてもごく僅かだったと思いますね。

### ◎東北帝国大学への志望

永田 (二高在学の) 当時、先生は、どのような本を好んでお読みになられたんでしょうか。

遠藤榮 私は、本は中学に入ったあたりから読んでました。昔は明治大正文学全集というのがありまして、それが私の叔父のうちにあったものですから、春休みとか夏休みとかになると、そのおじのうちに泊まりに行つてそういう本を読むのが楽しみでした。だから明治大正の主な作家の作品っていうのは、どのぐらい理解してたんだかもろんわかりません。わかりませんが、作家の名前とか、主要な作品とかいうのは大体頭にあったんじゃないかと思いますね。

永田 英文学を大学に入られて専攻されるのもその延長ということなんでしょうか。

遠藤榮 ええ。私が一番そういう意味で影響を受けたのは、私の先生である、東北大学の当時の英文学担当の教授だった土居光知先生です。『文学序説』という著書がありまして、で、二高のときにその本に出会って、それでもう、京都大学も東京大学も入るつもりだったらちょっと勉強すれば入れた時代なんですが無視して東北大に進みました。で、友達からよく「お前何でそんなことをしたんだ」って言われました。というのは、東北大学の法文学部は、当時は高等学校出身の者が進学するっていうところではなかったと思いますね。

永田 高等学校以外の方が。

遠藤榮 ええ、むしろ、そうです。高校出身者はできれば東大、できなければ京都大学、というのが普通で、東北大学はその次あたりにありました。だから東北大学に来たのはむしろ高等学校ではなくって、高等専門学校とか私立の高専とかですね、そういうところから来た人が多かったです<sup>(3)</sup>。特に文科はそうでしたね。それで、学生の数が非常に少なかったし、当時の英文の数は、私と同期生は、三人ぐらいでしょうか。私の一年上は二人とか、その上はゼロとか。で、私の下になると次第にふくらんできたんですが、私の時代ぐらいとその下ぐらいまでは本当に少なかったですね。

遠藤昭 戦争に向かっていた時代だから、英語はもうやんなくなっちゃって。希少価値だったんですよ、英文に進んだっていうのは。

大平 先ほどお話に出た柏倉先生<sup>(4)</sup>の影響が大きかったんでしょうか、二高生の時代の。

遠藤 榮 ええ。柏倉先生の影響が、一番大きかった。個人的にもお宅によく遊びに行ったり、そしてよく覚えているのは、一番町まで一緒に連れられて、お茶を飲みに出かけたことですね。柏倉先生は酒を飲むってことはどうもしないようで、で、そのときに「君はどの大学に進むことにしたんだ」と聞かれて「東北大学です」って言ったら、「ああそうか、もう仕方がないわな、いまさらそう言うんだから」って言われた覚えがありますね。

…略…

ただ私の目では、当時は、土居光知先生もそうだし、それから阿部次郎先生、小宮豊隆先生、漱石の弟子ですね、そういう先生が東北大学にはおられたんですよ。で、それはね、東大とか京大よりも私にとっては魅力的だった。で、とりわけ土居先生のさっき言った『文学序説』という本を読んで、それは決定的になったんですね。

### ◎教授面会日

永 田 学生生活の話なんですけれども、私たちよく東北大学の、特に戦前の卒業生の方でですね、お話を聞くといつも出てくるのが、面会日っていうものです。教授の面会日が決められていて、毎週のようにそこに面会に行っているような話を伺ったんですけれども、先生もよく行かれたんでしょうか。

遠藤 榮 ええ、土居先生の場合もやっぱり面会日が決まっていて、面会日にはまず休むことなく先生のところへお訪ねして、奥さんにはいろんな食べ物やお茶を出していただきました。

永 田 土居先生は何曜日だったんでしょうか<sup>(5)</sup>。

遠藤 榮 ええと、さあ、水曜日とかなんか、曜日は確かに決まってきましたね。

永 田 小宮先生、阿部先生の面会日は他の専攻の学生がたくさん来て入りきれないぐらいだったっていうような話をよく聞くんですけれども。

遠藤 榮 そうですね、人気っていう点から言えばそういうことが言えるかもわかりません。私はやっぱり面会日っていえば、土居先生、ということでしたね。ちょうど北五番町と四番町の中間ぐらいのところに住んでおられたときかな。それともあとでは、ずっと仙台の端っこの薬師堂のほうにお移りになったりしたものですから。

永 田 土居先生はそこでいつもどういってお話をされてたんでしょうか。

遠藤 榮 いや、先生のお話を聞くということよりも、教室外で直接お会いして心おきなくいろんなことを、雑談ができるということを楽しんだのではないのでしょうか。ですから何か教室以外の勉強をするっていうことではなかったような気がしますね。

永 田 勉強を離れての関係、そういう場であったということでしょうか。

遠藤 榮 ええ、そうですね。それで奥さんがいろんな美味しいものを出してくださるとか、そういうのが楽しみで。

鈴木 時間帯も決まっているんですか、その面会日っていうのは。

遠藤 榮 ええ、面会日は大体決まっていたんじゃないでしょうかね。

鈴木 いつも何時ごろ行かれるっていうのは決まっていたんですか。

遠藤 榮 お邪魔する時間はせいぜい二時間ぐらいだったろうとは思いますが、何時から何時までっていうところまでは、ちょっと思い出せないですね。

鈴木 いつもは遠藤先生お一人で土居先生のお宅に。

遠藤榮 いえ、その時間にはだから、学生が集まってくるわけですね。

鈴木 いろんなところから…。

遠藤榮 そうそう、決まってるから、何曜日の何時からって。だから大体、学生がそこでわつと集まっちゃう。だから奥さんは大変だったと思いますね。

鈴木 大勢来るんですか。

遠藤榮 大勢っていても英文は一年から三年まで合わせてもね、五、六人ですね。

### ◎勤労作業の記憶

永田 …（大学での）実際の授業の状況はどうだったんでしょうか。

遠藤榮 大学の方は、まともな授業っていうのはごく僅かしかできなかった筈だと思いますね。

永田 先生は十七年の四月に大学に入られて十八年の秋に入隊ということになるわけですが、その一年半の間でもそういう状況でしょうか。あまりきちんと授業が行われていないという状況だったんでしょうか。

遠藤榮 ええ、授業はあまり、実際は無かったんじゃないかっていう感じがしますね。受けることができないことが多かったという、どうも何かそんな気持ちが…。私の記憶にあるのは、戦争が済んでから。戦争中にね、卒業免状を送ってきたんですよ、文部省から。こっちが希望しないのに。だから学士号はもうもらっているんだけど、復員したあと、一年間はともかく授業料無しで大学に通っていいということになったんですよ。終戦後。それで私は一年間東北大学に通って、大体は土居先生の授業をとって。

遠藤昭 聴講生みたいな形で。

遠藤榮 あとは自分の好きな先生方の授業を受けていました。

永田 逆に言うと、入学された直後っていうのは、後々のご経験も合わせて、あまり勉強できなかったなあという気持ちが強かったっていうことでしょうかね。

遠藤榮 ええ、戦争が終わるまではですね。

永田 授業以外で、逆に言うと、先ほども出てきました勤労奉仕ですとか、勤労働員とかっていうご記憶はどうでしょうか。

遠藤榮 ええ、勤労奉仕は覚えています。仙台の隣の、長町の隣が、中田ですね。あその線路から海岸のほうに向かって広い畑と田んぼを所有していた農家がね、二軒か三軒あったんです。だからそこに何か行って、農作業をやらされたという。だから田植えをしたり、稲刈りをしたりという記憶はあります。

遠藤昭 農繁期だけですよ。

鈴木 となると春と秋の二期。

遠藤榮 まあ、そんなもんですね。

遠藤昭 泊り込みで一軒に何人ぐらいいる。

遠藤榮 三人ぐらいずつ。

…略…

永田 （遠藤先生が）大学にいらっしゃる頃の状況としては、多分夏休みとかにですね、全



学の学生を動員して三日ぐらい飛行場の造成をしたりだとか、そういうものがあるぐらいで、あとは個別的に、文学部でどこか行ったりだとか、理学部でどこか行ったりとか、そういう単発的なものが多いんですけども<sup>(6)</sup>、先生の行かれた援農もそういう感じなんじゃないかな。何人かの集団でいらっしやったんでしょうか。

**遠藤 榮** ここ(永田の持参した一覧表—注6参照)に書いてある項目に該当するようなことは、特には無いですね。大学には農作業の記憶はね、あるんだけど。あと、あれかな、仙台の師団に行って、訓練はされたけどね。教練は。

**遠藤 昭** 第二師団に行って…。

**永 田** 大学の教練はどんな雰囲気だったんですか。割合厳しかったんでしょうか。割合皆、真面目に教練には参加してたんでしょうか。

**遠藤 榮** それはやっぱり、学生であればせざるを得なかった時代ですからね。

…略…

**永 田** 当時東北大学だけでなくいろんな学校で勤労奉仕を、勤労作業をしたりとか、あるいはそれに限らずですね、色々な学生の行動をするときの組織として報国隊っていう組織<sup>(7)</sup>が制度としてはあったんですけども、実は当時の方に色々お伺いしてもですね、報国隊って記憶が無いとおっしゃられるのがほとんどで、勤労働員の記憶なんかはもちろんお持ちなんですけれども、報国隊っていう名前で何かをしたっていう記憶がほとんど無いっていう方ばかりなんですけれども。

**遠藤 榮** 私も無いですね。

**永 田** やはりそうですか。それから、例えば色々な儀式に集められたりだとか。例えば、昭和十六年の十二月八日に開戦しますよね。そのあと毎年のように東北大学では十二月の八日に総長が教職員学生を集めて訓示を垂れるというような儀式をやったことになってるんですが、その記憶を持っている学生さんもあんまりいらっしやらないんですが、そういうご記憶もあんまり無いですか。

**遠藤 榮** 私は、記憶が無いですね。…略…私は大学時代、戦争という意識は非常に希薄でした。時が来れば戦争に行かなきゃ行けないんだと、そういうことはわかってはいたけれども、日常的な生活では戦争をそんなに意識していなかったと思いますね。

## ◎「学徒出陣」前後

**永 田** 学徒出陣のあたりのことをお話お伺いしたいと思うんですが、いわゆる在学学生としての身分のままに入隊をされたわけですけども、当時の資料をもう少し探してみたいです。ひとつは、これは当時の河北新報の記事です<sup>(8)</sup>。昭和十八年の十月ですね、東北大学の学内で壮行会をやったときの記事のようです。もう一つ壮行会<sup>(9)</sup>があつて、これは十一月に東北地区、あるいは関東地区含めての(ものが行われています)

皆さん、いろんな方にお話聞くとですね、十月の大学の壮行会は全然覚えてないって皆さんおっしゃるんですね。宮城野原の方は覚えていらっしやる方が多いんですが、それはピューピューピュー風の吹く中で、すごく寒い思いをしたという記憶を持たれている方が多いようなんですね。

…略…

遠藤榮 思い出せないねえ。

永 田 意外と皆さん覚えてらっしゃらない方多いんですね。

遠藤榮 十八年の十一月なら…。

遠藤昭 まだ兵隊いく直前。(兵隊に行くのは)十二月だから。

遠藤榮 出ていっていても、おかしくない

永 田 先生は、十八年の十月二日に正式発表で徴集猶予が停止をされるということになりますよね。それでそのあと徴兵検査を受けられて入隊されていくと思うんですけども、そのあたりは割合、ぎりぎりまで大学にいらっしゃったんでしょうか、入隊をする直前まで。徴兵検査もあったでしょうけれども。十月から十二月っていう非常に限定された時期のことを聞いているんですけども。

遠藤榮 (兄は)ぎりぎりまで(大学に)いたと思いますね。うちに帰ってこなかったような気がします。本当に出征するときだけ、ノートを私に送りつけてきたから。だからずっと、やっぱりぎりぎりまで学校にいた筈ですね。

永 田 実際にそのような、いわゆる学徒出陣というような事態になるかもしれないということについては、多分十月以前のもっと早い段階からいろいろ話が出ていたかと思うんですが、そういうことは学生としては耳にはされていたんでしょうか。また兵隊に行くかもしれないということに関しては何をお感じになられたかをお伺いしたいんですが。

遠藤榮 ただ、まあ、常識的にはね、いずれ自分も戦争に引っ張り出されるということは、これは避けがたいことだっていうことはわかっているとは思いますが、五体満足であれば。ただ、戦争になったから自分たちにもすぐ影響が出てくるという意識は、案外薄かったと思いますね。だからいざとなるまでは、あまり戦争とか軍隊という意識は無かったように思います。

永 田 逆に言うと、そのことがきちんと決定されて、いよいよ軍隊に入らなければいけないということが決まったときの印象っていうのは覚えてらっしゃいますか。

遠藤榮 ええ、これも、それまでは大学に入った者は徴兵年齢、二十歳の徴兵年齢がきても卒業するまでは猶予するというのは当然だったわけですね。それがそうではなくなっただけに、何年生であるっていうにもかかわらず、学年にかかわらず、年齢が二十歳に達した者は全て徴集するということになったわけですから、それは前から覚悟していたということまでは言えないと思いますね。「そういう目に合う我々は不運だ」という気持ちは個人的には持っていましたので。

大 平 先ほどのお話では土居先生にそういうお気持ちを伝えられたというふうに伺ったんですけども、

遠藤榮 そうです、そのときもそういう話をしました。

大 平 同じ学友同士でそういうことを話し合うということは何？。

遠藤榮 学友同士では、あんまり戦争の話をしたという覚えは無いですね。むしろ軍隊に入ってから、休憩時間に「こんな戦争はばかばかしい、無いほうがましなんだ」という話をしたら、「そうさそうさ、私も賛成だ」と言われた覚えがありますね。

大 平 それはやはり、同じ学徒の間で、ですよ。

遠藤榮 ええ、同じ学徒です。…

### ◎海軍志望

遠藤榮 …当時はやっぱり、軍隊というものの士気は陸軍のほうが、何ていうか、強かったというふうに思います。訓練でも何でも陸軍だと下の者のことを考えないで、できるだけ厳しくやる。陸軍はそれがいいことなんだという。ところが海軍は下の者のことも考えた上でやってくれるゆとりがある。海軍のほうが人間らしいというふうに思います。で、どうもね、これは私個人だけじゃなくて、そういう考えは常識的にもあったんじゃないかという気がしますね。だから私は、陸軍はいやだから海軍に入ると決めたんですよ。

永 田 海軍に行かれるということはどの段階で希望を伝えることができたんですか？徴兵検査のときに伝えるんですか。

遠藤榮 そうですね。やっぱり学徒動員（徴集猶予停止）ということが決定された、そのときに。もともと我々は大学に入る頃はもう、とにかく軍隊には入んなきゃいけない、入らざるを得ないんだとわかっていました。

大 平 先ほども永田さん聞かれたんですけど、どの段階で、じゃあ私は海軍、とかいうのは。大学の中で希望調査みたいなのがあるんですか。

遠藤榮 いや、そんなことは無いです。大学自体の中ではそういうことをするっていうことは無いんですが。とにかく軍隊に入んなきゃいけないということは、これはもちろん避けがたい。五体満足である限りはね。これは避けがたいことなんだという意識を皆持っていたんですよ。だから大学生として軍隊の話はそんなにした覚えは無いけれども、やっぱり行くんだったら海軍のほうがより人間的だという、個人的にはそういう意識を持っていましたね。

### ◎出征

永 田 十月に徴集猶予停止になって、（その後）十二月付けで入隊という形で、横須賀（武山海兵団）にそのままいかれたということになりますでしょうか。実際に横須賀に行かれるときなんかはやはり、個人的な親しい人なんかと壮行式みたいなことをやったりはしたんでしょうか。

遠藤昭 兄貴が十八年の十二月に入隊するときに、角田から出征したんですよ。それで当時、別な学校の生徒さん二人と兄貴で三人。そのとき兄貴が代表で出征の挨拶をして、それで出征してったんですね。駅頭で。当時電車無いもので、バスで出したんですよ。

遠藤榮 角田の仲町と本町の曲がり角の近く。

遠藤昭 あれは私も記憶しています。私は当時中学二年生だったから。

永 田 お兄様が行かれるときのお気持ちというのはどうだったんでしょう。

遠藤昭 ええ、あのね、大学生まで戦争に連れていくんではこりゃ大変だなんていうふうに思いましたね。というのはね、うち商人で、商売やってたの。商売でもね、繭の集荷業っていうか、問屋だったんですよ。当時宮城県でも私のいる角田が一番繭出るところなんです。それで繭の集荷業をやってたんで。繭の集荷業って当時、まあ明治からなんだけれども、生糸作っ

てアメリカに売ってね。

今の自動車とかの意識とおんなじで、それでアメリカの国力というのをわかってたんですよ。それで十二月八日に戦争になったとき親父がね、「いや、困ったな」って言ったんですよ。で、「何が困ったの」つつたら、「国力が違うんだ」って話して。で、それ以上親父何も言わなかったの。それで「この戦はどうなんのかな」って私はそのとき思ったんで、兄貴が出征っていうことになって、「ますますこうおかしい方向だな」っていうあれはあったんです。そういうまあ、あれでした。

大 平 見送られて入隊するっていうのは、もしかするとこれが最後の別れになるかもしれないよっていうことですよ。当時ね、帝国大学まで通わせて戦争で死なすなんていうのも、親はそれは大変な思いですよ。…

### ◎横須賀海兵団から鹿児島航空隊

大 平 横須賀（武山海兵団）に入隊されてからそれからあと、どういうふうに訓練とか部隊配属とかなされていったんですか。

遠藤榮 ええ、横須賀海兵団、武山海兵団に入って、それから鹿児島航空隊に配属されて、鹿児島にいたのは半年以上、九ヶ月ぐらいだったかな。

遠藤昭 十九年二月に海軍予備学生を命ぜられて、このとき鹿児島に行ってるんだよね。

大 平 海軍予備学生っていうのは？

遠藤榮 当時予備学生という特別な階級を作ったわけです。大学、高専在学中の学生たちを徴集するためにね。ある程度の期間訓練を受けると、それを少尉っていう、少尉と下士官の中間にある予備学生というのになったわけですけども。

遠藤昭 そして十九年十二月に少尉任官して。

遠藤榮 そう。当時は大学からいくとすぐに少尉になれるっていうのがあったんですね。

遠藤昭 そして今度は土浦だね。

遠藤榮 鹿児島に来て九ヶ月ぐらいいたと思う。それから土浦の軍航空隊に移り予科練の教官になった。

大 平 そうすると飛行機…。

遠藤榮 海軍航空隊。最終的に飛行機の搭乗員としての条件が備わるとるかどうかってことを綿密に体格検査をされたわけですよ。そのときに視力がね、0.1か2か3か足りなかったのね。それは、天気の良い日に薄暗い部屋の中でやられたためです。普段私は両眼とも2.0だったんです。ところがね。それが甲種合格っていうのに該当するレベルに達しなかった。特に片方の目がちょっと悪かったらしい。その検査のあとね、検査官にちょっと呼ばれて、「お前、残念だったけど、仕方が無い。視力が規定より足りないから、我慢してくれ」って言われた。つまりそれで、飛行機の搭乗員にはなれないということがわかった。こっちは別に飛行機に乗りたいとは思っていなかったけど。当時は、いわゆる特攻という攻撃が、始まったあたりかな。

遠藤昭 そのあとだな、特攻は。

遠藤榮 うん、特攻というのはそのあとだけど。特攻に近い攻撃の仕方だ。そうした攻撃をする飛行機に乗る搭乗員の候補として訓練するっていう考えだったようだ。…略…

で、結局そのあとやったのは、一応の訓練を受けてから、予備学生という身分で、予科練の教官になった。

…略…

**大 平** 鹿児島航空隊ではどんなお仕事されて、どんな訓練を受けられたんですか。

**遠藤榮** 鹿児島のときはもう、普通の兵士と同じ訓練、基礎訓練、それで実際の、今度は（土浦で）自分の仕事をする場合には、予科練の教官という立場で仕事をするということになったわけですね。

**永 田** （鹿児島での訓練は）具体的にはどういう訓練なんですか。

**遠藤榮** 結局、普通の陸軍海軍と大して違いはないだろうと思います。ただ移動は全て駆け足で、それがね、本当にきつかった。それで、これはもう、あまり言いたくない話だけど、おなかをこわしてね、いるやつも中にいるんですよ、そうすると、どうしても下痢が出ちゃう。で、走ったりするとね、止めようがない。だから、そいつの後ろに走っている者は、それを浴びちゃうわけですよ。そういう経験はしたことありますね。

**遠藤昭** カッター訓練は横須賀だけだったの？鹿児島行ってからもやんなかったっけ。

**遠藤榮** うん、ボートで桜島に行って帰ってくるとか。そういう訓練も一応はされていた。

**遠藤昭** だからカッター訓練で、手とかお尻に豆とかができたって。

**永 田** そういう訓練されたときにもいろんなところの、いわゆる学徒兵の方なんかややはり一緒になられてるんだと思うんですけど、そういう、さっき少しお話しして、「この戦争はくだらない」というようなお話もされてたというようなことも仰られてましたけども、その他の、いわゆる学徒兵の方との繋がりはどういう感じだったんでしょう。

**大 平** 訓練受けてたときは、大体皆さん、遠藤先生と一緒に受けておられた方は、学徒上がりだったんですか。

**遠藤榮** 皆学徒。しかも私が入った時は、大学別に構成されてましたから<sup>(10)</sup>。ですから、東大、東北大が大体一つのまとまりになって、それからあとはいろんな、国立大学だったり、それから私立大学というような風に。

…略…

…それで休憩時間になると、よく私は自分がやってきた専門の話をして、講義をしてやるんですよ。なんか私がしゃべり役で。他の連中がまじめに聞いてくれたもんだから。

**遠藤昭** その話初めて聞いた。

**遠藤榮** だからシェイクスピアの話をしたり、他の作家の話をしたり。

**永 田** 他の人がそういう話をしてくれるってということもあつたんですか。

**遠藤榮** あんまり他はなかったですね。「軍隊に来たんだから自分は軍人一本槍だ」ということで、まじめにやってるのは、私は嫌いだった。で、そういうのは他のからも好かれなかったようですね。そういうまじめ人間は。「我々はもともと兵隊になるために成長したんじゃない、大学に入ったわけではもちろんないんだ」と。「いやでもしょうがないから来たんだ」ということは仲間同士で分かりあえてるっていう、気持ちがあつたんでしょうね。

### ◎予科練教官として

大 平 土浦の航空隊で予科練の教官になってどういうことを教えられたんでしょうか。

遠藤榮 予科練についてもね、飛行機に乗る技術、操縦の技術とか、それからその他、飛行機に乗っているんな仕事があるわけでしょう。そういうことをする者だけを養成するっていう必要が無いわけです。養成してもそうした者全部に仕事をさせることができるだけの飛行機も何も無いわけですよ。だから結局普通の訓練をやる。一般的な。当時の大学とか中学校でやった教練と同じような訓練をやるとか。

永 田 ああ、そうですか。持て余してたっていうことですね。

大 平 そうだったんだね。

遠藤昭 当時、そうでしょ。船も無い、飛行機も無い筈だから。

永 田 そうですよね。

遠藤昭 ちょっと話挟みますけど、兄は予科練の教官しいて、予科練生を募集するんですよ。で、宮城県で募集したときに、試験官で来るんですよ、仙台に。で、たまたま私のいところがね。二人受けたんですよ、予科練をね。そしたら兄が試験官で。で、いところを呼んでね、「何でお前ここへ来たんだ、こんなところ来るんじゃないよ」と兄貴が言ってたらしいです。すぐにいところが（私の所に）来てね、「頑張って兵隊になれ」って言われるのかと思ったっら、そしたら逆（のことを）言われてびっくりしたって、帰ってから私に報告したんです。まあ（兄は）そういう人だったんですよ。

遠藤榮 そうそう。だから休憩時間には、話すことは「我々がやってることはおろかなことだ」と。で、別のことを話してね、こっちは色々、本を読んだりなんかすることをやってたから、軍隊へ行くまで。話の材料があったわけです。

大 平 それだけ客観的に見ておられたということだと、海軍の航空隊に入隊して、一般訓練しかやってない状況を見て、「ああ、もう戦争は終わるな」というようなことは思われませんでしたか。

遠藤榮 ええ、それはね、やっぱり「もうこれは負け戦だ」ということは、かなり早くから、大体分かっていたね。外部の人々は「まだまだ日本は希望がある」と思っていたけども、我々内部の者はかえって、それは早く分かっていたと言えらると思いますね。

大 平 それはやっぱり入隊してからですか。

遠藤榮 ええ、入隊して。そうすると上のほうでもね、上官のほうでも正直な人は「我々はもう、自分の命を投げ出してやらなきゃあ、どうにもならないとこまで来てるんだぞ」というようなことをね、言ってくれる人もいるわけです。それでいろんな状況を見てると、「なるほどそうだ」と思うような戦況になってるんでね。だからもう、日本はアメリカに勝つなんていう考えは、私自身は最初から持ってなかった。

大 平 そうしますと、もう少しうがった見方をすると、「なんとか生きて戦争を終われるかな」というふうに思われましたでしょうか。

遠藤榮 うん、それはね、やっぱり先は見えなかったですね。先は見えなかったです。ただ、無条件降伏をしたわけですね。だからそのときには泣き悲しんだ者もいるけど、私は「これはいいことだ」と、「これから新しい未来が開けてくるんだからいいじゃないか」って、なんか

皆に話していた記憶がありますね。

…略…

大 平 土浦の近辺で爆撃にあったところとかいうのは

遠藤榮 土浦航空隊自体が爆撃を受けました。当時は、一番受けたのはもちろん東京で。東京が爆撃を受けているのは、土浦でも大体分かることが多かった。それで土浦航空隊にいる時に予科練を連れて横須賀航空隊に行って、飛行機の格納庫を作るためにね、小さな山が飛行場の端にあるんですよ、そこを掘ってくりぬいて、飛行機の格納庫っていうか、飛行機を爆撃から守る場所を造る作業をね、私が指揮をしてやらせてた。で、そのときには何度か、もう一步っていうところで、私が命を落としかねないことはありましたね。で、ともかく練習生を全部、防空壕の中に入れて、それで私が一番最後に入ろうとした時、敵機が頭上を通過して爆弾を落としたりしました。防空壕の入口にこう立ってね、敵機の行動を見てるわけですよ。すると敵機がね、そばにある丘の向こう側からひょっと姿を現して、こっちをね、機銃掃射してくる。爆弾じゃなくって。それを三度ぐらいやられましたかね。当たって死んでも当然だったんですが。後で見ると、防空壕の入口に弾痕がみんなついてるんですよ。私のとこだけ外れて。だからその点では、幸運だったんでしょな。

大 平 それは艦載機ですね、いわゆる。航空母艦から飛び立った。土浦も爆撃を受けてるんですか？

遠藤榮 土浦自体も受けましたね。

大 平 そのときは土浦にはいらっしやったときですか。

遠藤榮 ええ、土浦にいたときですね。…

大 平 仙台空襲の情報は何？

遠藤榮 ええ、仙台空襲の話は、聞いたのは、土浦のときではなかったでしょうかね。

大 平 予科練生も飛行訓練でなくて、土木作業ばかりだったって言うんだよね。道路造ったりとか。

遠藤榮 そうそう、土木作業が多かったですね。飛行機が無いのに航空隊っていう。人をいっぱい集めたんだなって。

それから練習生が、これは土浦の航空隊だったと思うけど、基礎訓練を済ませた予科練の子供たちがね、訓練をするんです。離陸、着陸のね。で、それを、こっちは土木作業みたいなことを監督しながらこう、見てるんです。そうすると、離陸をするときに機種を上げすぎて、すとんと落ちちゃって、重心を失って…。それを目の前で見たことがある。

## ◎終戦

大 平 八月十五日はやっぱり土浦で迎えられたわけですか。

遠藤榮 そうですね、ええ。土浦が最後だったと思いますね。

大 平 そのときは全員集められてラジオの放送を聴いたんでしょうか。

遠藤榮 いや、それは、最初に降伏を聞いたのはね、将校たちだけを集めて、土浦の航空隊司令から「こういうことに、天皇陛下が決定された」という話を、一般の国民にそれを流す前に聞かされたときです。

遠藤昭 玉音放送する前に。

遠藤榮 ええ、一番最初、将校だけを集めて。…

大 平 それからですか、正午の玉音放送。

遠藤榮 そうですね。その後です。

大 平 そのときにじゃあ、全員集めて、練習生も。…略…で、玉音放送をお聴きになってから、さっきのお話をされたわけですよね。

遠藤榮 うん、練習生たちにはその前に話をしていたと思いますね。将校たちが司令に集められて、「戦争はともかく負けたことを天皇がお認めになったんだ」という話を聞きましたからね。だから隊に戻ってそのことは伝えた筈だと思います。

大 平 放送前ですか。

遠藤榮 ええ、放送前だと思いますね。

永 田 隊に戻られて話されたときの反応は、どういう状況だったでしょう。

遠藤榮 そうね、もう、確かに、何というか、ひどく残念がって、「自分も命を投げ出してもいい」というようなことを言っていた者もいたけれども、「それはおろかなことだ」ということで、それを実行した者は、(私の) 部下には無かったと思いますね。ただ、同じ将校の中では、自殺未遂みたいなことまではあったかもしれないけれども。でも、大部分はもう、「戦争が終わって、ともかくこれで命は救われた」というふうに思った人が多いのはこれは当然のことだなと思いますからね。

大 平 それから半月ぐらいして、召集解除ということになるんですよね。でも、面白いって言っちゃ失礼ですけど、解除になる直前に中尉に昇進するんだね。

遠藤昭 ポツダム中尉って言って、終戦になってから。退職金みたいな、そういうものの額が違うんですよ。だから少しでも多くしたほうがいいということで。

### ◎補習科生としての復学

大 平 九月解除になってすぐに角田にお戻りになられたんですか。

遠藤榮 そうですね、角田に戻ったのは。

遠藤昭 当時ね、学生結婚してたんですよ。それで、角田に行ったんじゃないの、だから。角田に来たんです。(土浦から) 戻ったあとは。

鈴木 じゃあもう、学徒出陣の前にもう (結婚していたんですね)

遠藤昭 そのときには既にもう (結婚していました)、ええ。

永 田 それで復学されるわけですよね。

遠藤榮 ええ、帰って一年間は授業料免除で大学に通うっていうことを政府が認めたんで、一年間は、やっぱり実際に勉強したのは一年にもならないぐらいですから、だからそれで大学卒業の資格だけ、免状だけは貰ったけど、実質は伴ってないわけですよ。それで終戦後は一年間は、国立大学は授業料無しで、通うことを認めて<sup>(11)</sup>。で、好きな授業に出ていいということだったんで、一年間通いましたね。就職するのに一年間。

今考えてみると、終戦になってすぐにね、いろんな大学から「うちの大学に来てくれ」っていうのが、東北六県全部の県からうちに来たんですよ。つまりはこっちは大学卒で、何というか、



大学教師になる資格は一応持ってるわけ、免許状は。それで、しかも戦後で、新しい大学がどんどん方々で建ち始めているときですね。だもんだから教師が足りない。資格のある教師が。

**遠藤昭** 特に英文学の専攻でしょ。だから引き手数多だったんですよ。戦後は、やっぱり英語教育だっていうことになったんで。

**遠藤榮** だけど、私は「卒業免許は持ってるけれども、それだけで勉強したわけじゃないから」って一年間は全部お断りをして、東北大に通ったんですね。で、一年経ったら今度はね、大学から話が全然無くなっちゃって。それで、どうしようかなって思ってたなら、なら仙台一高があった。大学にそのうち移れる可能性があるかもしれないから仙台一高あたりがいいんじゃないかと友人が言うんで、仙台一高に行くことにした。当時は一中でした。

**永田** 補習科として復学されたということに関しては、十八年に入隊されたかなりの数の方々がそうされたんでしょうか。学徒出陣された方が、結局一年半しか実際の学生生活を送ることができなかったわけですが、遠藤先生のように戦後、補習科のような形で復学された方は多かったのでしょうか。

**遠藤榮** それはね、ちょっと・・・私のように一年間通うっていうのは数としては少なかつたんじゃないかと思いますね。大学卒という資格は持ってるから、それで社会に出て仕事ができれば、仕事に就いた人が多かったんじゃないですか。

**大平** 八月十五日に敗戦になって、解除されますよね。で、角田に戻られて、大学に通われ始めたのは、履歴書では十月一日に復学っていうふうになってるんですけども。

**遠藤榮** おそらく、他に何もすることは無いですからね。だから仙台に戻って、あ、角田から仙台に通ってたんだ。一年ぐらいはそうしたんじゃないかな。

**大平** じゃあ東北大学への通学は角田から。

**遠藤榮** うん、通った記憶はありますね。一年ぐらい。

**遠藤昭** 前半は角田から通って、あとは仙台に…。

**遠藤榮** あとは仙台に、家内と一緒に。家内のおじさんが家を持ってたもんだから、そこを使わせてもらって…。

---

#### 注

- (1) 現・宮城県角田高等学校
- (2) 土居光知：どい・こうち (1886～1979)。英文学者。高知県生まれ。東京帝国大学卒業。東京女子大や東京高等師範の教授をつとめたあと、1923年(大正12)から欧米に留学し、帰国後東北帝大教授となる。ウェールズやロレンス等の作品を日本に紹介する一方、ヨーロッパの詩文との比較を通じて、日本の古代詩歌に関する研究も進め、日本文学研究にも大きな影響を与えた。主著は『古代伝説と文学』など。戦前より文化使節として国際的に活動し、戦後日本がユネスコへ加盟する際にも大きな役割を果たした。
- (3) 実際の統計では、昭和17年四月法文学部入学者(本科生のみ)のうち高等学校卒業者は323名、高等師範・専門学校・実業専門学校卒業者は52名。ただし文科のみに限ると、高等学校卒業者6名に対し高師・専門学校・実業専門学校の卒業者は26名と、いわゆる「傍系入学者」が圧倒的に多くなる。
- (4) 柏倉俊三：かしわくら・しゅんぞう。英文学者。旧制第二高等学校教授。戦後北海道大学教授、相模女子大学長。遠藤氏は二高在学中柏倉教授に私淑し、その影響で英文学を志した。「柏倉先生は、何とい

うか、人柄も非常に優しく、しかも、何ていうか、学力が生徒から見たら評価なんかできないんですけど、先生の中ではおそらく一番、この先生は学力がある方だということがわかるような先生でした」とのこと。

- (5) 遠藤氏が在学中の状況は不明だが、昭和十四年の『法文学部学生要覧』によれば、各教授の「自宅面会日」は下表の通りであった。土居教授の面会日は火曜日とされている。

高橋 里美	毎週金曜日	新明 正道	毎月第2・第4土曜日午後7時
阿部 次郎	毎週木曜日	伊澤 孝平	毎週土曜日 午後7時
鈴木 宗忠	毎週水曜日	小町谷 操三	毎月第1・第3土曜日午後7時
小宮 豊隆	毎週水曜日	中川 善之助	火曜・金曜以外（要電話）
武内 義雄	毎週金曜日 午後7時	金倉 圓照	毎週水曜日 午後7時
千葉 胤成	毎週木曜日	廣濱 嘉雄	毎週水曜日 午後7時
村岡 典嗣	毎週月曜日	服部 英太郎	毎週水曜日 午後7時
土居 光知	毎週火曜日 午後7～10時	奥津 彦重	毎週火曜日
石原 謙	毎週木曜日 午後7時	小林 淳男	毎週土曜日
福井 利吉郎	毎週土曜日 午後7時	大脇 義一	毎週月曜日 午後7時
岡崎 義恵	毎週金曜日 午後7時	カール・レーヴィット	毎週金曜日 午後4時

- (6) 東北帝国大学における集団的勤労作業については、拙稿「展示記録 「学徒」たちの「戦争」—東北帝国大学の学徒出陣・学徒動員—」（『東北大学史料館紀要』第二号 2007年3月）参照。但し本調査で遠藤氏が触れているような短期・少人数の援農の実態を十分に把握できているわけではなく、具体的な実態の解明が課題となっている。
- (7) 東北帝国大学では昭和十五年十月に発足した「東北帝国大学振興委員会」の小委員会で「修練組織ノ強化」に関する議論が行われ、評議会で数度の審議を行った結果、昭和十六年四月より「東北帝国大学報国会」が発足した。同年八月にはこの「報国会」の下部組織として「東北帝国大学報国隊」が設置され、学生の戦時動員組織として基本的な役割を果たす。拙稿「東北帝国大学の『学徒出陣』」（『東北大学史料館紀要』第二号 二〇〇七年三月参照）。
- (8) 『河北新報』昭和18年10月9日記事「心は早決戦場へ 紅顔に闘魂湧る東北大学徒出陣壮行会」
- (9) 昭和十八年（1943）十一月十七、十八日に文部省主催の東北・北関東地区学徒野外連合演習が仙台近郊で実施され、県内中等学校と北関東・東北地区の高等・専門学校および大学合わせて六十三校から一万人弱の学生生徒が参加した。東北帝大からは最大の五百六十六名（附属医学専門部等含む）が参加している。壮行式は演習終了後宮城野原練兵場（現在の宮城野原運動公園付近）にて行われ、文部大臣と熊谷岱蔵東北帝国大学総長の壮行の辞、在学生代表による送辞ののち、出陣学徒代表が答辞を述べた。
- (10) 武山海兵団で大学別に分隊が編成されたことについては、蜷川寿恵『学徒出陣』（歴史文化ライブラリー43 1998年吉川弘文館）参照。
- (11) 昭和十九年九月卒業者（十八年十一月仮卒業者）を対象とする補習教育については、東北帝国大学の実態については全く明らかになっていない。東京大学では昭和二十年十月九日の学部長会議で「卒業セル復員学生ノ補習教育ハ聴講生トシ授業料ハ免除スルコト」とし、同年十月三十日の学部長会議では「帰還学生（仮卒業）学生ノ補習教育ニ関スル件」が議題とされ、各学部ごとに異なる対応が報告されている（『東京大学百年史』通史編第六編第四章）。

〔付記〕本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「帝国大学学生史資料の基礎的研究」（課題番号 20530681 研究代表者永田英明）の成果の一部である。